

## 7 海知<sup>かいち</sup>のシンカン祭り [無形民俗文化財]

[所在地] 天理市海知町

[保持団体] 海知町自治会

[概要]

天理市海知町の倭恩智神社<sup>やまとおんち</sup>では9月第1週の土日を挟んだ3日間にシンカン祭りが行われる。初日の朝から、氏子から輪番で選ばれた大当屋（オトウヤ）と補助役の小当屋（コトウヤ）、前年と来年の大当屋が当年の大当屋宅に集まり、朝から祭りの準備を行う。夕食後、庭の四方に竹を立てた結界<sup>けっかい</sup>の中で、釜に湯を沸かして、巫女の湯立神楽<sup>ゆたてかぐら</sup>がある。

二日目は宵宮<sup>よいみや</sup>とされ、午前<sup>にないもち</sup>に神饌<sup>はなごく</sup>の用意をする。荷餅<sup>なないろ</sup>、花御供<sup>ごく</sup>、七色の御供<sup>おしき</sup>を折敷の上に順に載せた神饌10膳<sup>しんせん</sup>を神饌箱に納める。午後からは、氏子代表、神主、白紙に包んだ洗米を括りつけた御幣<sup>ごへい</sup>を持った両当屋、神饌箱の順に大当屋宅より神社へ渡御<sup>とぎよ</sup>をする。夕刻、神前で巫女の湯立が行われた後、氏子に対し、邪気を祓い長寿を祈る巫女の神楽が続けられる。

三日目の祭りでは、朝から蒸し飯を皿に丸く盛った蒸御供<sup>むしごく</sup>をつくる。両当屋は、柳の小枝に根つきの稲穂<sup>はっほ</sup>（初穂）を括りつけた御幣を持ち、蒸御供の上に花御供を重ねた神饌と甘酒を納めた神饌箱を担ぎ、神社へ渡御する。

シンカン祭りは、安永6年（1777）の記録等から古くは特定の家から成る宮座<sup>みやざ</sup>で担われていたことがわかるが、昭和11年からは村全体で当屋を出すようになった。古くは両当屋は、竜田川で禊ぎをし、大当屋の門口に榊2本を立てて氏神の分霊を迎え、精進潔斎<sup>しょうじんけっさい</sup>して祭りに奉仕した。現在でも大当屋宅での巫女の湯立や特殊神饌<sup>とくしゅしんせん</sup>を用意するなど、奈良盆地<sup>みやざきいし</sup>の宮座祭祀の特徴をよく残している。



大当屋宅での御湯



七色の御供